

一七世紀アルメニア商人の活躍

——貿易ディアスポラとしての——

浅田 實

一、はじめに

ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見以来、ポルトガル、オランダ、イギリスなど、西ヨーロッパ諸国の船が、インド洋に商業的に進出していったことはよく知られている。一六世紀から、一七世紀にかけて、かれらはムスリム商人などアジアの人びとが築き上げていたインド洋貿易網をつぎつぎと破壊し、インド洋商業をしだいに掌中におさめていった。当初かならずしも、アジア諸国に対して経済的優位には立っていなかったヨーロッパ諸国商人が、比較的容易に成功をおさめることができたのは、かれらが海上での武力闘争に強かったからであった。アフリカの南をまわってインド洋に達する長途の旅を経た後でも、平和で無防備なインド洋海岸では、かれらは容易に自らの足場を見出すことができた。⁽¹⁾ 陸上での争いはとにかく、海上での争覇戦では、ヨーロッパ諸国の方が、まさっていたからである。

なかでも、ポルトガルに代って、一六世紀末から一七世紀はじめに進出したオランダ、イギリスの時代になると、海上武力だけではなく、海上商業力の点でも、ヨーロッパの優位は動かしがたいものとさえなった。一九世紀に西洋海洋国家

がアジア各国をつぎつぎに支配していくその端緒が、ここに開かれた。

それまで、ユーラシア大陸には、ヨーロッパとアジアを結ぶ陸上の商業ルートがあった。古代には絹の道といわれたそのルートは、一六、七世紀に西洋海上商業勢力の進出によって、破壊され、砂漠に埋もれてしまったかと思われた。たしかに、西洋海上勢力は、これから一七、一八世紀と時代が進むにつれて、いよいよその進出が露骨になり、それまでアジア土着の商業勢力が行なっていた地方間海上貿易をも奪取する勢いであった。時とともにアジア現地商人の活躍舞台は、せばめられ、やがて一九世紀には、ヨーロッパ商人に完全におさえられる。

一六、七世紀の大航海時代とそれに続く西洋商人たちの進出は、アジア商人たちの活躍舞台をいよいよ圧迫し、なかでも内陸キャラバンによる商業活動をまったく衰微させることになった。ユーラシア長距離取引の、シルク・ロード時代は、このころ漸く終って、マリン・ロードの時代を迎える。このように考えられやすい。

ところが、ここで取上げるのは、一見陸上キャラバン・ルート時代から海上大航海ルートへと貿易・商業ルートが改変されたとみられる一六、一七世紀に、むしろかえって今まで以上に、アジア内陸路商業の発展に活路を見出した商人たちがいたことである。たしかにヨーロッパ側だけからみれば、一六世紀のポルトガル時代から、一七世紀オランダ、イギリス時代にかけて、大航海ルートによる海上貿易は、一段と盛んになったのだけれども、これによって、アジア内陸貿易は下火になったのではなく、むしろかえって活況をとりもどしさえしていたのである。以下は、そのような事情を、貿易デミアスポラの代表とも見られるアルメニア人を中心にみようとしたものである。

二、トインビーとデミアスポラ

一七、八世紀と発展していった西洋国民国家の理念が、二〇世紀の今日でも人びとの間に根強く残っているからである

うか。われわれは、戦争か何かで国家がなくなれば、もうすべてが駄目のように観念しがちだ。そこから、植民地や半植民地支配をうけた民族や文明を侮蔑するような気風も、生じてくる。国家がなければ、民族のまとまりも得られないし、民族やその文明を持続させる絆もなくなる、と考えやすい。しかし、一時的に国家を失ったところで、民族や文明を維持していれば、きびしいけれども亡国の非運に耐えて自己の特性を失わなければ、いつかは自国をも回復することができ

る。

アジアの多くの国々には、一九四五年ころまで、多くが西洋列強（ならびに日本）の植民地支配を受けてきた。多くが亡国の苦しみを味わってきた。それでもそれは、せいぜい一、二世紀間のことにすぎなかった。われわれはともすれば、西洋列強諸国が強烈な圧力を加えた一九世紀の国家観が、固定的で永続的なものであるかのように、考えがちである。一九世紀の政治地図などは、ごくごく一時的なものにすぎないのだ。

一時的に国が亡んでも再起することはできる。国が亡んでも、その民族や文明は消滅するわけではない。民族や文明がその独自性を失なわないで、存続することの方が、政治的なその国の興廃よりか、はるかに大事なのではないか。このように主張したのは、二〇世紀を代表する歴史家といわれた、かのアーノルド・トインビーである⁽³⁾。

トインビーの『歴史の研究』に対しては、とかくアカデミックな歴史家たちの間で、批判が多いのだが、私は、アメリカの歴史家マクニールと共に、少なくともつぎの点で、トインビーを評価してもいいのではないかと考えている。マクニールは、『歴史の研究』の基本的想定⁽⁴⁾という論文の中で、つぎのように述べている。

人類の歴史の複雑多岐な様相を理解可能な一本の秩序にまとめ上げようとする努力が、この書（『歴史の研究』）の偉大な点であろう。そこでは、従来の専門領域を大胆に打破し、知られうる人類の過去のすべてを自分の領域としている。研究分野をますます小さく限ることだけでは、人類の過去についての理解を、これほど豊かにすることは望みえない。このような大きい視野、大胆な仮説と、精密詳細な学識の交流こそ、現在のわれわれ歴史家が必要とするものである。

(4)
る、と。

しかしマクニールがトインビーに敬意を表しているのは、さらにつぎの点にあった。

トインビーは、歴史の研究を、究極的な哲学的な問題と結びつけていた。「人類はどんな運命をもっているか」等、人間存在に関する重大な問題に、決然と立ち向かっていこうとする態度、がそこにはあった。(5)

とマクニールが認めているそのような、根本的な「歴史研究」に対する真摯な姿勢こそ、二十一世紀を目前に控えた今、歴史研究を志すすべての人に要請されているところだと思う。ただ単にナレーションが詳しいだけでも、読んで面白いだけ、でも困るのだ。そのような究極的要請にこたえながら、壮大な総合の試みをあえてしたトインビーに、マクニールと共に、大いに共鳴したいと思うのである。

そしてそのようなトインビーが、将来かりにすべての国家政府をまとめ上げた「世界国家」「世界政府」を構想するとき、そのような「世界国家」の下で、現在ある諸民族や諸国家はどうなるのか、そこでのあるべき姿を示そうとした。そこから生まれたのが、たとえば、政治的自立、独立性を失なったとしても、民族としての個性、文明を失なわなければ、よいのではないか。民族や文明の価値を存続させることの方がよほど尊いのではないか、という考えであった。そしてこういう考え方にもとずいて、歴史の中からトインビーが、摘出したものが、ディアスポラといわれる人たちの事例に他ならなかった。(6)

まき散らす diaspora (dia+sperein) という意味のギリシア語からきた「ディアスポラ」というのは、もともと「四散」という意味で、紀元前六世紀のユダヤ人の「バビロン幽囚」(これでもってユダヤ人は国家を失なう)以後、異邦人の間に四散した、そのようにして四散した全ユダヤ人のことを称したものであった。しかし、ユダヤ人に限らず、祖国の政治的独立を失なってもなお、民族としての独自性、独自の文明を存続させ、何千年にもわたって、生き続けた民族のことを、「ディアスポラ」と称するようになった。

こういうところから、「ディアスポラ」というのは、つぎのように定義することができる。①異郷の地に離散しているのに、異郷の風に同化しない。あくまでも、故郷での生活文明を、失なわない。②しかしそのために、異郷の地では拒否される。そういう中で創意工夫して生きてゆく道を考えていく⁽⁷⁾。

というわけで、「ディアスポラ」というのは、「亡命離散民」とでも訳するのが適當かと思われる。そしてトインビーが、例としてあげている「亡命離散民」には、ユダヤ人のほか、ゾロアスター教系のパーシー教徒がある。ルイ一四世の「ナント勅令廃止」で、イギリスやオランダに渡った「ユグノー」なども、一時期、これに近かったと思われるが、やがて、それぞれの異郷の地に同化されてしまったので、「ディアスポラ」ではなくなった。

三、貿易（商業）ディアスポラ

トインビーのあげている「ディアスポラ」は、右にみたように、はなはだ宗教色の濃いものであった。独自の民族的文明をもつというとき、宗教はその基底部をなすと思われるから、これは当然のことだが、当面われわれが関与している、近世商業との関連で国を失ってもなお、商業民として各地で活躍している人たちを、ここではとり上げたい。

前近代の世界各地で、外国に住んでいる貿易業者は、その土地の人から別れて特別に住まなくてはならない理由はない。ただし何らかの特別街区でもつくらなければ、外国から来た貿易業者は、一世代かそこらで、親社会に同化し、消えてしまう。そうなると、異文化間の橋渡し役をするというかれらの能力は、消えてしまう。ディアスポラ商人でなくなってしまうわけである。

貿易ディアスポラ商人は、住みついた先の異郷社会に接触すると共に、自分の母国文化を保存して、本国からやって来た旅商人に対するブローカーとして役立つことも必要なのである。現実には、商人であり外国人でもあるという二重の資

質を持ち続けることは、かなりむづかしい。そこで、貿易ディアスポラ商人たちは、たがいの共同感情をもち、共通の職業を維持していくために、宗教や言語等々によって結合をはかる。今までになかった共同感情の新しい紐帯をつくり出す方法をも考える。ここでもやはり、信者だけの排他的所有物である宗教が、欠かすことのできない意味をもつ。貿易ディアスポラ商人の歴史でもやはり、宗教が重要な役割を、果たすわけである。⁽⁸⁾

貿易ディアスポラ商人についての、最も古い文書史料は、紀元前二〇〇〇年ころのもので、アッシリアからカッパドキアに入った商人たちであった。かれらアナトリアのカッパドキア商人植民地に入った人たちは、その地に住みつき、めつたにアッシュールには帰って来なかった、という。⁽⁹⁾

紀元前八〇〇年ころまでに、フェニキア人の貿易ディアスポラ商人たちは、西地中海に進出していった。このような貿易ディアスポラ商人の手を通じて、地中海沿岸各地の個々の文化の間の接触が広まり、相互に連絡できる諸地域に、広く分散していった。⁽¹⁰⁾ 時代は少しく下るが、インドネシアのウジュンパンジャン(マカッサル)は、南スラウェシ貿易ディアスポラの中心拠点であったし、一六世紀にインド洋にやってきたポルトガル人は、各地から移り住んできていた、さまざまな貿易ディアスポラ多数のうちの一つだといことができた。⁽¹¹⁾ カトリック教の統制のきびしかったスペイン支配下のマニラには、中国人貿易ディアスポラが、一六世紀には相当な活躍をしていた。一五七一——一六〇〇年ころのマニラ在住中国人は、八〇〇〇人だったという。東南アジア各地にひろがった華僑もまた、貿易ディアスポラの一つといことができた。⁽¹²⁾

しかし、西洋勢力がインド洋に進出した一六、七世紀頃、東西陸上貿易に活躍した貿易ディアスポラ商人は、アルメニア人であった。そこで、以下では、アルメニアとアルメニア商人について、みていくことにしたい。

四、アルメニア共和国とアルメニア人

現在ソ連邦領内に、アルメニア・ソヴィエト社会主義共和国がある。黒海とカスピ海との間のカフカス地方に位置している。アルメニアという地域には、この他、トルコ東部のアルメニア高原などのところがある。アルメニア人は、長い間、いわゆる祖国をもたなかったが、ソ連内に共和国ができたために、首都エレバンを中心とするこの共和国に、世界の全アルメニア人約六〇〇万のうち半分以上にあたる三三二万の人びとが住んでいる。(一九八三年現在)

ユダヤ人などと同じく、政治的にはトルコ、イラン、ロシア等の国ぐにに圧迫され、歴史上ほとんど国土を有しなかったが、アルメニア語という共通の言語と独自の宗教によって今なお結ばれている。国はなくてもアルメニア文明というものを、持ち続けてきたわけである。言語はインド・ヨーロッパ語系でペルシア語に近いというが、独自のアルファベットをもっており、この地域ではもともと早くから書かれた言語であった。宗教はキリスト教の一種だが、この地方のキリスト教としては比較的よく知られているビザンツ帝国正統派とも、ネストリウス派キリスト教とも違った、独特のものである。前三世紀——後三世紀のころにパルティア王国の勢力がこの地に及んでいたために、はじめイラン系、ギリシア系の多神教の影響を強く受けていたが、紀元後二世紀、三世紀とキリスト教への改宗がすすみ、四世紀にはキリスト教がアルメニア人の国教のようになった。ところがそのキリスト教が独特のもので、アルメニア・グレゴリウス派正教会(略してアルメニア教会)といい、本山は首都エレバンの西方エチミアジンにあつて、カトリコスといわれる首長が統括している。そしてこれが、世界各地に散在しているアルメニア民族の紐となつてゐるわけである。

独自のアルファベットであるアルメニア文字は、五世紀のはじめ四〇五—六〇六年ごろ、メスロプ・マシトツによつてつくられたが、この文字もまた、アルメニア人の民族統合の基軸をなしている。⁽¹³⁾

歴史的には、すでに紀元前一四世紀のヒッタイト年代記にその記録があるが、前六世紀五九〇年頃メディア王国に滅ばされるまで、ウラルトゥ王国というのを形成していた。紀元前二世紀から前一世紀にかけてアルタシセス朝の大アルメニア王国が繁栄し、とくに前九五年から前五五年のティグラン大王のとき全盛を迎えていた。ところがその後、ローマとパルチアとがアルメニア争奪戦を展開するようになり、その犠牲となった。パルチア王国のあとササン朝ペルシアの支配を受け、その下で、先述した言語と宗教による民族統合の基軸が、形成された。

七世紀に入ってイスラム教が生まれると、六五二年には、アルメニアもアラブ軍に征服された。この頃から中東全般の各地でイスラム教が興隆してきたのだが、アルメニアはその中で、ムスリムの海に浮かぶキリスト教の島、いわば孤島のような地位を維持するようになった。十字軍の遠征が行なわれた頃、アルメニア人はシリア北部に、小アルメニア王国（二〇八〇——一二三七五）をつくったが、一四世紀にはオスマン＝トルコに征服された。アルメニア故地もまた、モンゴルの後チムールに占領され、祖国は存在しないままであった。⁽¹⁴⁾

一六、七世紀には、強勢を誇ったオスマン＝トルコとサファヴィー朝イラン両国の間で、アルメニア争奪戦が展開され、一六三九年の条約で、一応両国の支配領域が確定した。一八世紀になると、その上にロシア・ピョートル大帝の南下政策が加わり、それに対抗して派遣されたトルコ、イラン両国干涉軍との争いで、この地は著しい政治混乱に巻き込まれた。アルメニア人としては、トルコ、イラン両国の圧迫から逃れるために、ロシアに頼ろうとしたが、結局はそれがロシア勢力の南下を招くことになった。一八二八年に結ばれたトルコマンチャール条約で、東アルメニア地方はロシアに併合され、今日のアルメニア・ソヴィエト共和国の原型が形成された。しかしその後も、一八九五—一六年のトルコ政府によるアルメニア人民族運動に対する大虐殺などがあり、民族の政治的悲劇は、なおも続いていた。

いずれにしても長年にわたる外国勢力の支配によって、ロシア各地、中東各地に広く散在したアルメニア民族は、ユーラシア大陸各地諸都市の商業活動で、顕著な役割を演ずることになった。

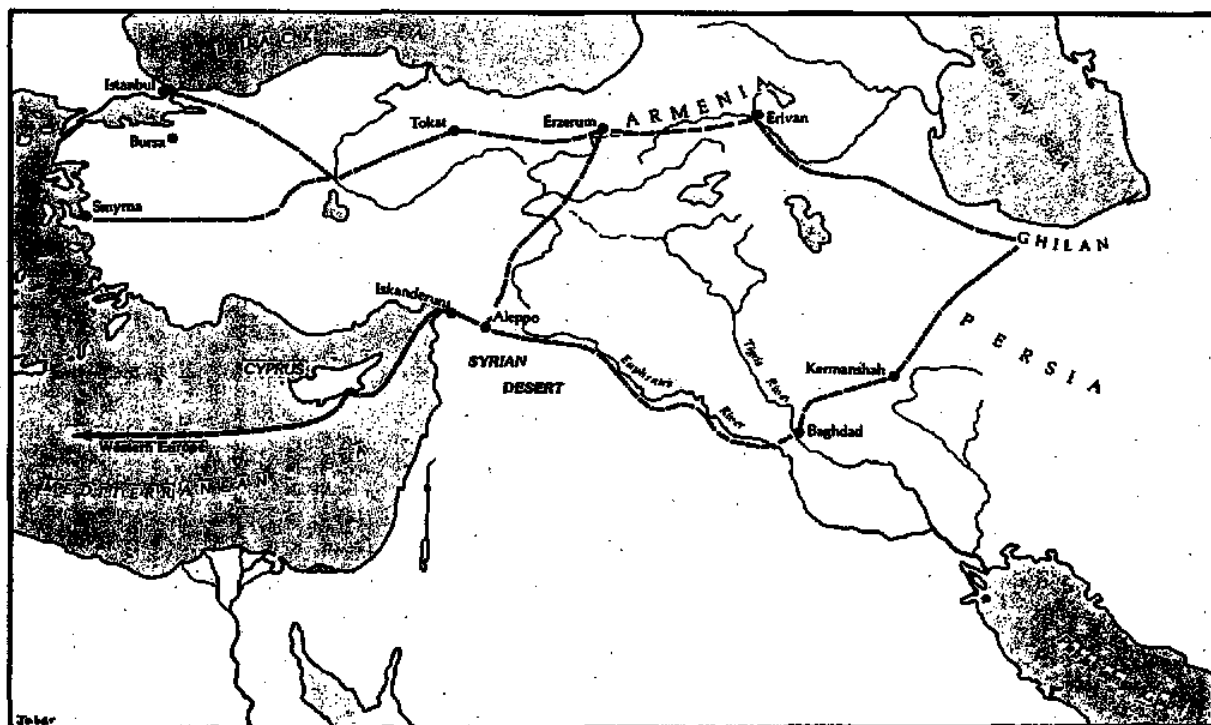
五、アルメニア人の商業活動

アルメニア高原を中心としたアルメニア人の故地は、まったく海岸をもたなかったが、地中海から東方に向かう陸上貿易を行なうのに、うってつけの地理的位置を占めていた。そこは、カスピ海、黒海、地中海によってつくられた三角形で、囲まれていた。黒海や地中海から東に向かった隊商は、カスピ海の南を通過するために、アルメニアを経由することが多かった。カスピ海の南を通過した隊商は、トランスオクシアナを通って北東へ向かい、西域地方の絹の道を通って中国に行くことができた。あるいはまたもつと南のアフガニスタンを通って、北インドのインダス、ガンジス平原に行くこともできた。いずれにしても、カスピ海の北端を通る道は、政治的に不安定で安全でない場合が多かったので、モンゴル帝国の時代を除けば、ほとんど利用されなかった。

このほか、地中海の東アレップ付近からティグリス、ユーフラテス川上流に達し、そこからペルシア湾に下っていくルートがあったが、ここは必ずしもアルメニア人の住地に直接関わっていないけれども、アルメニア人たちが、このルートのもつとも重要な陸上貿易業者であった。地中海からペルシア湾まで、四五日ないし七〇日で通過したこのルートは、香料のヨーロッパへの流入路でもあった。⁽¹⁵⁾

アルメニア人の商業的成功は、当然のことながら、国際関係のなかにおけるアルメニア人の位置にも依存していたが、それは時代によって大きく異なっていた。

すでに早くウラルトゥ三国の時代にも、中国絹の断片がみられ、アルメニア地方が中国商品を受け入れていたというが、古代世界で注目されるのは、前二世紀のアルタシエス朝の時代であった。この頃アルメニア人は、カスピ海から地中海のレヴァント海岸に達する地帯を統制し、パルチア帝国経由で中国から入ってくる絹の取引で、重要な役割を果たし



〔地図Ⅰ〕 アルメニア人の祖国と商業ルート
(P. D. Curtin, Cross-Cultural Trade in World History による)

た。その後もアルメニア人は、商業貿易活動に活躍したけれども、前二世紀から前一世紀にかけての頃が、もっとも盛んであった。⁽¹⁶⁾

その際アルメニア人たちは、他の貿易業者のように、かれらのルートに沿うところに貿易植民地を形成した。その多くは、定住した地域の住民たちに吸収、同化されたけれども、一部はアルメニア人として、かれらの主体性を維持し、故郷の地との強い接触をとりもどして、アルメニア人としての感覚を保ち、独自の文明を保存した。

キリスト教の一派であったとはいいながら、一四五三年にビザンツの首都コンスタンチノーブルが、オスマン＝トルコによって占領される以前から、アルメニア人たちはオスマンと親密な関係をうちたてた。一三六一年ころまで、オスマン＝トルコはブルサに首都をおいていたが、かれらはこのブルサに、アルメニア人貿易定住地とキリスト教総主教宅を設けた。トルコの首都が、その後アドリアノーブルへ、イスタンブール(コンスタンティノーブル)へと動いたとき、アルメニア人たちも一緒に移動した。一九世紀末から二〇世紀はじめにかけて、トルコは激しいアルメニア民族運動弾圧を行なうが、それまで、アルメニア人は、首都イスタンブールの主な商業勢力の一つを形成していた。⁽¹⁷⁾

クリミア半島にもアルメニア人の植民地が形成され、一四、五世紀には活発な商業活動が行なわれたが、ここでは陸上貿易を担当したアルメニア人が、海路地中海から黒海に入ってきたジェノア人貿易ディアスポラを、保護したほどであった。当然アルメニア人たちはここクリミア半島のカッファでも、民族的独自性を維持し、アルメニア人教会に忠実であったが、この地に強い文化的影響を与えていたタタールの言葉を学んで話しはじめ、アルメニア語で、それを書くことさえあった。

ところが一四七五年にクリミア半島を占領したトルコ人は、この地のアルメニア人を圧迫したので、その多くは、西に移動しモルタヴィアや南ポーランドのガリシア地方など中央ヨーロッパで、貿易ディアスポラとして活躍することとなった。⁽¹⁸⁾

六、ニュー・ジャルフア

一六世紀から一七世紀にかけて、ポルトガル、オランダ、イギリス商人があいついで、海路インド洋に入ったが、この頃イスラム世界では、オスマン・トルコ、サファヴィー朝イラン、ムガル帝国の三強国が興隆していた。アルメニア人と関係がとくに深いのは、サファヴィー朝イランであったが、イランは当時オスマン・トルコと激しい領土争いを展開していた。一六世紀ころアルメニア人貿易ディアスポラの人たちは、一部はカスピ海からヴォルガ川をさかのぼる商業貿易に従事していたが、一六世紀末ころから、他のアルメニア人は、アフガニスタン越えの陸上貿易によって、インドのグジャラート地方やムガールの首都アグラに来ていた。

サファヴィー朝イランは、一六世紀中頃までオスマン・トルコのシュレイマン一世（一五二〇—一六六六、在位）によって、今日のイラン西部とイラクの大部分を占領されていた。ところが、シャー・アッバス大帝（一五八七—一六二九年、在

位)は、東方に領土を拡大して、イランを大帝国とした。その際シャー・アッバスは、イスラムに改宗したグルジア人やアルメニア人を重用した。また従来の首都タブリーズに代って、イスファハンに新しい都を建設し、ムスリム美術工芸の中心地とした。⁽¹⁹⁾

イスラムに改宗してサファヴィー朝に貢献したアルメニア人たちは、貿易ディアスポラではなくなったが、シャー・アッバスはトルコとの対抗意識もあつて、改宗しないアルメニア人に対しても比較的寛大であつた。かれらキリスト教徒アルメニア商人も、一部はイスファハン付近に移住した。トルコ領内のアルメニア高原から、カスピ海のすぐ南のギラン州に絹生産者として定住した人も多かつたが、専門商人として生計を営んでいた富裕な人たちは、新首都イスファハンの城外に、住みついたのである。こうしてアルメニア商人が住んだ首都イスファハンの郊外地は、ニュー・ジャルファとよばれた。その結果イスファハンは、ムスリム政治中心地の側に、キリスト教徒アルメニア人商業中心地をもつ、二重の町となった。

シャー・アッバスの好意もあつて、ニュー・ジャルファのアルメニア人たちは、自分たちの商業的利益を高める機会を得た。一七世紀はじめのことで、イギリス東インド会社商人が海路インド洋に到着したのと、ほぼ同時期であつた。一六二二年に東インド会社は、シャー・アッバスのイランに協力して、ペルシア湾のオルムズ島から、ポルトガル勢力を追い出した。オルムズの島は廃墟とされ、それに代って、オルムズ対岸のペルシア湾入口に、バンダー・アッバスの新港がつけられた。ニュー・ジャルファのアルメニア商人たちは、陸路ヤズド、サイダバードを経て南下し、バンダー・アッバスの港に到着して、そこからインド洋各地に商業的に、進出できるようになった。⁽²⁰⁾

その後、ニュー・ジャルファやギランにいたアルメニア人に対するサファヴィー朝支配者の好意は、時に薄れることもあつたけれども、だいたい一七世紀を通じてアルメニア人ディアスポラ商人は、大いに活躍することができた。一八世紀になると、サファヴィー朝のアルメニア人に対する好意もなくなり、一九世紀のカジャール朝にかけて、政治的にも不安

定となったため、富裕なニュー・ジャルファのアルメニア人の多くは、インド、トルコ、ヨーロッパの各地に、四散していった。ニュー・ジャルファのアルメニア商人にとって最もよかった時代は、一七世紀だといことができた⁽²¹⁾

それでも、絹の産地ギランに定住したアルメニア人は、地味ながらも、カスピ海からヴォルガ川への貿易を持続し、イギリス・モスクワ会社従業員アンソニー・ジャンキンソンの赴いたアルハンゲルスクから中央アジアのブハラへの旅⁽²²⁾に同行する、などした。この方面への貿易は、一八世紀まで続き、ツァリツィン（今のヴォルゴグラード）からモスクワ、さらにセント・ペテルスブルク（今のレニングラード）までのルートが、川船と荷車とで利用された。

一七四〇年代ころの見積りでは、ギランからアストラハンまで北行の旅は三十日間、アストラハンからモスクワまでが四五日間、モスクワからセント・ペテルスブルクまでは二〇日間、合計九五日の旅程だった、という。同じころ、ギランから地中海への旅は、スミルナ（今のイズミール）まで七〇日、アレppo（今のハレプ）まで六〇日といわれていた。⁽²³⁾ところが、サファヴィー朝とオスマン朝との戦争が多かったため、輸送の点は、地中海がロシア経由・バルト海向けより圧倒的に有利というわけでもなかった。

絹貿易についていうと、一八世紀はじめにヴォルガ・ルートで年約一三〇トンの絹が、アルメニア人によって運ばれたが、そのうち約三分の一がロシアで売られ、残り三分の二がヨーロッパ各地に転売された。ギランでの絹の生産量は、その後一八世紀中頃には約一一〇トンに下がったが、イラン国内で消費されたのは、そのうち約二〇%ほどにすぎなかった。ヴォルガ経由で北方に輸出されるものが多く、産出量全体の七〇%を占め、残りの一〇%が、スミルナやアレppoなど地中海に運ばれた。⁽²⁴⁾

一七三四年には英露商業条約が結ばれて、英国商人がアストラハンやギランにも、少数ながら住まうようになったが、商品の運搬や通訳、異文化間の連絡は、いずれもアルメニア人によって行なわれた。

七、商人ホヴァネスの事例

一六七二年から一六八一年まで、インドとペルシアに旅行したので知られるイギリス人ジョン・フライヤー⁽²⁵⁾は、イスファハンとニュー・ジャルファにいたアルメニア商人について、つぎのように記述している。

「アルメニア人たちは、故郷で貿易のあらゆる複雑なことについて、その技術をみがいている。そしてそういう技術をもつて、もつとも遠く離れた王国に旅する。それから、かれら自身の勤勉さと、かれらの親類の人（血族関係のある人）と同じ正直さをもつ人を商館員とすることによって、もつとも富裕な人となる。そうして、かれらがやってくるころではどこでも、売買契約のエキスパートとなり、そうなることによって仲買業者を避け、あらゆる儉約のやり方を研究して、私どもだったら五〇トマン⁽²⁶⁾Thomands（ペルシアの貨幣単位、一トマンは約五九〇シリング）でもできない旅行を、五〇シリングで行う。ゆで卵と革袋一本のワインをもつて出発し、イスファハンから海岸の港まで、それを持ちこたえる。

しがない野獣に乗って行くのだが、その港でそれを売るか、貸出金をとって送り出すか、する。かれらの唯一の支出は、馬のための食糧だけである。付き添いなしで旅行するので、かれらのふとんはただちに馬衣として役立ち、馬をねかせる。かれらは貿易における一種の私拿捕業者で、何も買わないし、何も支払わない。

かれらは何らかの後援者によって、商業の舞台に入り、その後援者の金でもって取引する。そしてその収益金については、利得の四分の一が、かれら自身のものとなる。このようなはじまりから、かれらは時々、多額の財産を自分自身のために、主人のためにも、つくり出す⁽²⁷⁾。」

以上のようにフライヤーが記述しているが、まったくそれを裏書きしている事例を、他の史料でみていきたい。前節で

もみたように、イスファハン郊外のニュー・ジャルファが、このころのアルメニア商人ディアスポラの最大中心地であった。右のフライヤーの記述中にもあったように、ここに本拠をおいていたアルメニア人大商人は、ここから往来して出かけていく若い人びと（手代）を通じて、取引するのが普通であった。この手代は、できれば家族の一員であるのが、もっとも望ましいが、いずれにしてももつとも信頼のできる人を選ぶ。貿易や取引のやり方、外国の状況については、テキストなどを用いて訓練をする。徒弟商人の学校ともいふべきものさえ、ニュー・ジャルファにあったという。⁽²⁸⁾

主人の命令で各地に商業取引のために出かけていった手代は、その任務の一部として、かれが旅先で行なった取引全体を記した航海（旅行）日誌をつけねばならなかった。ジョン・フライヤーより少しおくれで、一六八二年二月一九日から一六九三年二月三日まで一〇年以上にもわたって、このような日誌をつけたホヴァネスという人の記録が、伝えられている。おそらくは、アジア内陸部各地あるいは、陸路・海路を利用しての旅商人たちの記録は、何千とあったであろうが、残っているものは、これくらいだという。以下は一九六六年と一九八二年に発表された英文の史料紹介から、要約したものである。

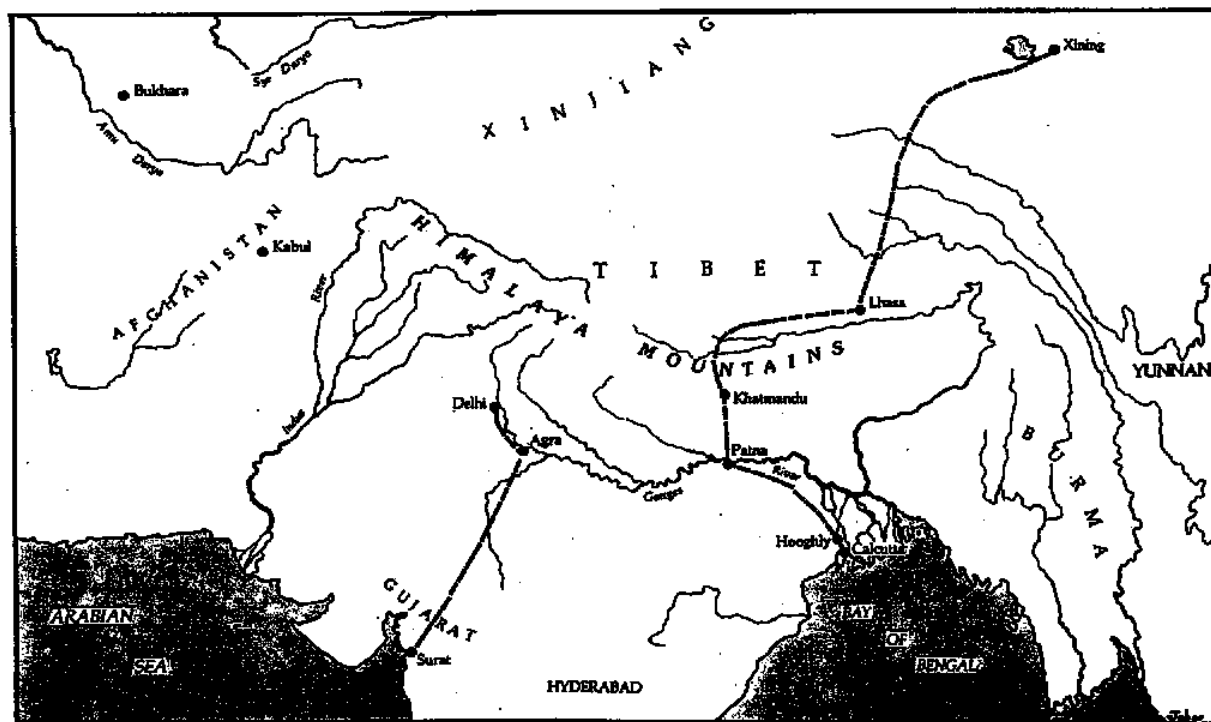
ニュー・ジャルファの大商人の手代であったホヴァネス・ジョファエツツイという人は、主人から資金を得て、ニュー・ジャルファからインド方面への旅に出た。その場合、資本の持主であるかれの主人は利益の四分の三を、ホヴァネスは利益の四分の一を得る、と契約で定めていた。地中海からムスリム世界に広く行なわれたコメンダによる協定が結ばれていたわけである。⁽³⁰⁾しかし、手代であったホヴァネスは、自分でも資本をもち、主人の資金による取引のかたわらで、自分の計算で貿易に従事することができた。

インドに到着したホヴァネスは、小売商人としての旅をしながら各地を歩き、ときどき海路ペルシア（イラン）から入ってくる荷物を受けとるために、スラト（グジャラート地方）に戻った。その記述の中に、当時定住していたアルメニア人は、スラトに一三人、アグラに九人、と書いているが、これは代表の大商人のみの人数かと思われる。⁽³¹⁾このようなイン

ドの商業都市には、アルメニア教会があり、アルメニア人の僧もいた、という。

先にも述べていたように、ホヴァネスは、主人の資金、計算で取引をしていた他、自分の計算での取引も行なっていたが、更に別の商人とも協定を結んで取引を行なうようになる。ホヴァネスの関係した取引が、インド現地で更に複雑になったわけである。アグラのアルメニア人代表に、アベティックという人がいた。この人もまたニュー・ジャルファのホヴァネスの主人とは別の大商人の、手代であった。一六八六年にホヴァネスとアベティックは、協定を結んで、新しい事業をはじめることになったが、この二人はいずれも、ニュー・ジャルファにいるそれぞれの主人にしばらくはたまたま、そうしたのであった。⁽³²⁾

両人はそれぞれ自己資金を等分に出しあつて、計九三七〇ルピー（銀一〇六・三キログラム分）の資金をつくった。これでもって、宝石とインド織物を仕入れて、ホヴァネスが他に二人のアルメニア人従者を連れて、三人で武装して、アグラから商業取引のための旅に出た。まず一六八六年二月、アグラを発ちガンジス川をパトナまで下つて、ネパールへ行った。それから三カ月、カトマンズに滞在し、同年九月チベットのラッサに到着した。



〔地図Ⅱ〕 ホヴァネスの旅路と関連した地域
(P. D. Curtin による)

チベットにも一七世紀末のこの頃、アルメニア人共同社会があったことがわかるのだが、ホヴァネスはラッサで在住アルメニア人の家族のところに下宿した。そこで今度はかれ自らが居住商人のような生活をして、ラッサで商業活動を行なった。その途上、ラッサからさらに北東一七〇〇キロのチンハイ（青海）省東部にあるシーニン（西寧）に向かったアルメニア人商人に、資金を委託した。自らは赴かなかったが、資金を委託して中国内陸との商取引きに資本参加して、利益を得ようとしたわけである。出かけたアルメニア人商人は、チベット商人、カシミール人と共に、たつぷり一年をかけた旅をした。そのような資金委託による取引もしながら、ホヴァネスは数年ラッサに滞在したのである。

一六九三年になって、ホヴァネスは麝香四五八三キログラム、金五・一キログラム、陶器その他の中国産品をもって、チベットを發ち、帰途についた。旅はかならずしも平穩無事ではなかったが、カトマンズを経て、パトナに戻り、そこからガンジス川下流のフーグツに帰った。そこでかれはまた付近とのせまい範圍の取引きに従事した。ところが一六九三年一二月はじめのところで、記録は突然なくなっている。⁽³³⁾したがってその後のことは、わからない。

八、貿易ディアスポラとしての活躍

しかしそれでも、ニュー・ジャルファを基点としたアルメニア商人たちのムガール領インドでの、商業的活躍の状況を具体的に知ることができる。アルメニア人たちは、ムガール領インド社会のなかの、サブ・グループとして共同体社会をつくっていた。もし何らかの紛争がかれらの間でおこったときには、自分たち共同体社会内で片づける。その意味では自治的なアルメニア人社会を、つくっていた。アルメニア教会をもち、集会をもっていたことは、かれらの民族としての独自性を示すものであり、ディアスポラ商人であることを意味していた。

一般的にいつて、アルメニア人貿易業者は、かれらが住みついたところで、現地勢力と様々な関係を結ぶが、かれらが

そこで最初に求めた特権は、まずアルメニア教会の建設であつた。同時に自分らのやり方で儀式を行う権利であつた。こうしてかれらはまず、教会を通じて共同社会をつくる。それから政府当局者から、政治的自治を得、商業特権を得るのである。一七世紀当時かれらの主要基地となつたニュー・ジャルファそのものが、こうして生まれたイスラム世界のアルメニア人共同体社会であつた。⁽³⁴⁾

そこから、インドに手代として派遣されたのが、ホヴァネスであつたのだが、アルメニア人共同体社会は、インドばかりではなく、オスマン・トルコ領内にも、ヨーロッパにもつくられた。十字軍がイスラエルからシリアにかけての地域にいくつかの十字軍国家をつくつた一一、一二世紀頃、アルメニア人はエデッサ付近に、小アルメニア王国をつくつていたが、一三七五年にトルコに滅ばされたとき、イタリアに亡命したアルメニア人が多かつた。しかしかれらはイタリアの都市で、しばらくはアルメニア人街区を形成していたが、やがて現地の文化と生活に吸収同化されてしまつた。⁽³⁵⁾

それでもその後も一六〇〇年ごろを中心に、新しいアルメニア人のヨーロッパへの移民の波がみられた。ニュー・ジャルファから出かけていった人もいた。フランスの最初のカフェの経営者はアルメニア人であつたし、マルセイユのイラン初代領事も、アルメニア人であつた。一七世紀のフランスでは、トルコ人が得られない権利を、アルメニア人は得ることができた。オランダやイギリスでも活躍する者がいた。しかしヨーロッパでは、その文化に同化吸収される場合が多かつた。

異教徒や異民族の中で、アルメニア人としての民族の独自性を維持し、貿易ディアスポラとして、主に活躍することができたのは、イラン、トルコ、ロシアの他インド各地においてであつた。これら各地に定住したアルメニア商人たちは、他のアルメニア人のための委託売買業者であることも多かつたが、それがまた異郷の地にアルメニア人居住区を維持することにつながつた。またかれらアルメニア人たちは、一種のキリスト教徒でありながら、ムスリムの土地を上手に旅行したために、外交官として用いられることもあつた。遠くにいる主人のために、外交的なこともした専門商人がいたのであ

る。エチオピア宮廷に仕えたり、バタヴィアに使したりした人もいた。ペルシアのシャール・アッバス王のために、一六〇〇年頃、イギリスやフランスに貿易使節として送られた人たちも、アルメニア人であった。⁽³⁶⁾

九、アルメニア商人と西欧商人

ともあれ、アルメニア人の商業、外交活動は、貿易ディアスポラとしてのかれらの独自性を示すと共に、一七世紀末になってもなお西アジアからインドにかけての貿易世界が、活発であったことを示している。なかでもインドは、オランダ、イギリス両東インド会社船来航のなかで、内陸商業の面でも全般的成長がみられたのを知ることができる。先にあげたホヴァネスは、自らは旅しないで、ニュー・ジャルファの主人のところに、商品を送り返したり、送り出したりすることができた。一六世紀末以来、ムガル・インドでは、金銭さえ、容易に輸送することができた。両替商、商人、政府役人を通じて、輸送できた。しかも手数料というか、利子も安かった。一七〇二年には、カルカッタのアルメニア商人グループが、イギリス東インド会社の船をチャーターして、貿易を行なっていたが、これもまた当時インド商業でのかれらの活躍ぶりをうかがわせる。陸上ルートでの取引をもとに、海路を通じての商品輸送も行なっていたわけである。⁽³⁷⁾

もちろん、アルメニア人だけが、陸上ルートの唯一の貿易取引業者ではなかった。けれどもかれらは、広範なアジア内陸貿易では、もっとも成功した貿易グループであった、ということができた。治安のよくない当時のアジア世界にあって、惜しむことなくかれらはルート保護のための支払いを行なった。⁽³⁸⁾ 強力な支配者のもとで、むしろすすんで働こうとした。西洋貿易カンパニーの商人など、強大な競争相手の商業にまだ支配されていない、すきまのところで、すすんでかれらは活躍した。それが、かれらの成功の秘密であった。

とにかく、アルメニア商人がこのころ蓄積した個人財産は、少なくともロンドンやアムステルダムのもっとも成功した

商人たちの財産と、同じくらい大きかった。⁽³⁹⁾その上さらに注目しなくてはならないのは、つぎの点である。アルメニア人のインドでのいわば競争相手であった一七世紀末当時のヨーロッパ人は、海軍など軍事力と手をたずさえて、貿易していた。アルメニア人も時には武装したが、かれらが利用することのできた強圧権力はごく限られたものであった。⁽⁴⁰⁾むしろ、武力など用いないで、現地政府の保護に、依存しながら取引を行なったところに、かれらの成功の秘密があったとも、いえそうである。

西洋経済史上、一七、八世紀は、重商主義の時代といわれ、インド洋やアジア貿易ばかりでなく、大西洋各地間貿易やヨーロッパ諸地域間の商業活動もいよいよ活発になった時代であった。取引される商品の種類も、その取引高もいやが上にも、多くなっていた。

しかし、ここにみてきたように、それはヨーロッパ商人だけにみられたことではなく、アルメニア商人らが活躍した西アジアや南アジア世界にもみられた現象であった。たしかに一七五〇年ころ以後、西洋勢力のアジアへの進出がいよいよ苛烈をきわめてくると、かれらアジア内陸に活躍する商人たちの活動の場は、なくなっていくた。しかしそれは、アジア現地の政治的不安によるところも大きかったに違いない。そうなるまでの一八世紀はじめ頃まで政治的にも商業的にも、アジアはまだ健在だったわけであり、商業的にはむしろ活況を呈してさえ、いたのであった。貿易ディアスポラ、アルメニア人の活躍は、そのことを、教えてくれる。

註

- (1) 拙著『商業革命と東インド貿易』法律文化社、一九八九年第二刷、三二—三三頁参照。
- (2) キャラバン・ルートの根強さについては、同書、五四—六〇頁参照。
- (3) 以上の点については、山本新『人類の知的遺産、七四、トインビー』講談社、昭、五三年、二二六、二三三頁参照。
- (4) William H. McNeill, *Some Basic Assumptions of Toynbee's 'A Study of History'*, 野村純孝訳、W・H・マクニール『歴史の

- 研究』の基本的想定」(『トインビー著作集、別冊、トインビー研究』)社会思想社、昭、四三年、一一〇、一一一、一一二頁。
- (5) 同書、一一三—四頁。
- (6) 山本新『トインビーと文明論の争点』勁草書房、一九八七年第五刷、七一—七五頁。
- (7) アーノルド・トインビー『歴史の研究』(完訳)第四巻、下島達ほか訳、経済往来社、一九六九年、一—七九頁。
- (8) 「貿易ディヤスポラ」『Trading Diaspora』という用語は、マクナー・コーエンという人類学者によって、はじめて用いられた。
- Claude Meillassoux (ed.), *The Development of Indigenous Trade and Markets in West Africa*, London, 1971, p. 267.
- (9) M. T. Larsen, *Old Assyrian Caravan Procedures*, Istanbul, 1967, p. 3, p. 4~5.
- (10) Sabatino Moscati, *The World of the Phoenicians*, London, 1969, p. 27-30.
- (11) M.A.P. Meilink Roelofs, *Asian Trade and European Influences in the Indonesian Archipelago between 1500 and about 1630*, The Hague, 1962, pp. 132-8; Holden Furber, *Rival Empires of Trade in the Orient, 1600-1800*, Minneapolis, 1976, p. 315.
- (12) Rafael Bernal, 'The Chinese Colony in Manila, 1570-1770', in Alonso Felix, (ed.), *The Chinese in the Philippines*, Manila, 1966, pp. 238-40.
- (13) 以上については、平凡社大百科辞典「アルメニア共和国」の項はか参照。
- (14) D.M. Lang, *Armenia: Cradle of Civilization*, London, 1978, p. 53~p. 58.
- (15) ヤン・ハイクン・フォン・リンズホーテン『東方案内記』(大航海時代叢書、八巻)岩波、一九六八年、一二二頁—三頁。
- (16) Lang, *op. cit.*, pp. 96, 130-1.
- (17) R.W. Ferrier, 'The Armenians and the East India Company in Persia in the Seventeenth and Early Eighteenth Centuries,' *EC. HR.*, 1973, vol. 27, pp. 38-62.
- (18) Keram Kevonian, 'archands arméniens au XVII^e Siecle,' *Cahiers du monde russe et soviétique*, 1975, vol. 16, pp. 208.
- (19) Niels Steensgaard, *The Asian Trade Revolution of the Seventeenth Century*, Chicago and London, p. 1974, p. 71ff.
- (20) R.W. Ferrier, *op. cit.*, p. 40; John Carswell, *New Julfa: The Armenian Churches and Other Buildings*, Oxford, 1968, p. 32.
- (21) Carswell, *op. cit.*, pp. 14-15.
- (22) ジェンキンソン他『イギリスの航海と植民』(大航海時代叢書、第二期、一七巻)岩波、七一五頁、モスクワからプハへの船旅。T.S. Willan, *The Early History of the Russian Company 1553-1603*, Manchester, 1956, p. 146, p. 153.
- (23) Philip D. Curtin, *Cross-cultural Trade in World History*, Cambridge, 1984, p. 191.

- (24) Jonas W. Hanway, *An Historical Account Oer the Caspian Sea*, London, 1754, vol. 1, pp. 57-59.
- (25) 「一七五〇年」のロンドンで生まれ「一七〇代」のベルギー・インドに旅行し「一七三三年」に死んだジョン・フライヤーについて
⁴⁵ John Fryer's *East India and Persia*, Works issued by the Hakluyt Society, 2nd ser. no. 19, 1909, vol. 1. Introduction, p. Xi, p. XXVIII.
- (26) N. Steensgaard, *op. cit.*, pp. 413-419.
- (27) John Fryer's, *op. cit.*, vol. 2, the Hakluyt Society, 2nd ser. no. 20, 1912, p. 249.
- (28) John Chardin, *Sir John Chardin's Travels in Persia*, London, 1927, p. 281.
- (29) Lyon Khachikian, 'The Ledger of the Merchant Hovannes Joughayetsi,' in *Journal of the Asiatic Society*, 1966, vol. 8, No. 3, pp. 153-186; Pierre Jeannin, 'The Seaborn and Overland Trade Routes of Northern Europe in XVIIth and XVIIIth Centuries,' *Journal of European Economic History*, 1982, vol. 11, p. 5-59.
- (30) コメンタール協定については、大塚久雄「著作集」第一巻（株式会社発生史論）岩波、一九六九年、三五〇頁ほか。
- (31) L. Khachikian, 'Le registre d'un marchand arménien en Perse, en Inde et en Tibet,' *Annals, E.S.C.*, 1967, tome 22, p. 233.
- (32) *ibid.*, pp. 238ff.
- (33) *ibid.*, pp. 242-3, p. 263.
- (34) K.N. Chaudhuri, *Trade and Civilisation in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge, 1985, p. 225.
- (35) P.D. Curtin, *op. cit.*, p. 199.
- (36) Steensgaard, *op. cit.*, pp. 68-74.
- (37) K.N. Chaudhuri, *The Trading World of Asia and the English East India Company 1660-1760*, Cambridge, 1978, p. 83.
- (38) 「東洋のたのめをいふ」について、前掲拙著「商業革命」三六—三七頁。
- (39) Chaudhuri, *op. cit.* (*Trading World*) pp. 137-138.
- (40) Curtin, *op. cit.*, p. 204.